

手工業生産からみた奈良・平安期の地方社会

梶 原 義 実

はじめに

近年、文理を問わず多くの研究分野において、学際的研究・学融合的研究・学知横断的研究など言葉はいろいろだが、学問の垣根を越えた協力作業の必要性が論じられている。考古学においても、関連諸学との協業は必要不可欠であり、とくに先史考古学の分野において、自然科学をはじめとした学問分野との協業が活発に模索されている。一方、歴史考古学という用語で括られることが多い考古学的諸研究においては、その言葉が示すとおり、歴史学（文献史学）との協調は前提であり、その研究史の最初期段階から、ごく自然のこととしておこなわれてきたものの、その方法論について議論されることは、これまですくなかったように思う。

本稿では、歴史考古学におけるこれまでの研究のあり方について考え、その有効性や問題点を指摘することで、古代の社会像を解明するにあたり、今後歴史考古学が文献史学とどのような連携をとっていくのが望ましいかについて私考を述べていきたいと思う。

なお歴史考古学とは、当然文献資料・物質資料双方の残る地域すべてに適応されるべき研究概念であるが、筆者は世界の考古学全般について検討する知識も力量もなく、本稿では日本の歴史考古学を対象をとどめる。また、表題にもあるとおり、筆者の専門分野である手工業生産研究、とくに瓦の研究からの提言という形をとる。

I 「歴史考古学」の現状と課題

この章の内容については、過去に一部を文字にしたことがあるが【梶原 2006】、ここでは本稿全体の趣旨にあわせて詳しく再論したい。

いまから 20 年ほど前までの歴史考古学においては、文献の読解や文献史学の研究動向にも精通した考古学者たちによって研究が主導され、考古資料を文献に記載された内容に当て嵌める形で研究が進められた。筆者の主な研究対象である瓦研究を例にあげると、この時期の瓦研究においては、中央系瓦当文様の分布域について、文献史料をもとになんらかの歴史的意義を与えていくという手法が研究の中心であった。

小田富士雄氏は大宰府政庁やその周辺で出土する「老司式」「鴻臚館式」と呼ばれる瓦が、大宰府管内の諸国に数多く分布する現象について、筑後守・肥後守を相次いで勤めた「道君首名」

の治績と重ね合わせ、彼をはじめとした国司たちによって、管内諸国で造寺活動が奨励され、また瓦当文様もたらされたものと考えた。それと同様の見解として、森郁夫氏は、各国国分寺への平城宮系瓦の波及について、上総等6ヶ国の国司を勤めた「百済王敬福」の治績等と関連づけて論じた。

また八賀晋氏は、美濃における川原寺式軒瓦の分布について、壬申の乱に功績のあった氏族に対し、寺院造営を可能にする政治的・経済的基盤を与えた証しであるとし、法隆寺式の瓦の分布が法隆寺の庄倉の分布と一致するという鬼頭清明氏の研究と並んで現在でも高く評価される。

しかしこれらの分布論的研究は、調査事例の増大による検討資料の増加を待つまでもなく、すべての瓦資料について厳密にあてはめることができるわけではないという問題がある。例えば諸国の国分寺の瓦の中には、中央系とは到底考えられない文様の瓦も多く（上記百済王敬福が国司を勤めた国の中にも、出雲など非中央系瓦を採用した国が存在する）、また美濃以外の川原寺式瓦の分布域については、壬申の乱の行賞だけでは解釈できない。

そのような中で、分布論的な研究の多くは、瓦の分布という同一の事象に対して、その場その場でいくつもの解釈をおこなっていくという結果を生んでいく。それは考古学的資料こそもちいているが、解釈の多くが文献史料に大きく依拠しており、文献史料という「錦の御旗」のもとでの考古資料の恣意的解釈である、ともいえよう。

山崎信二氏はそのような研究動向に対して、次のような警鐘をおこなっている。

「過去の瓦の論考は、あるいは一部について事実が指摘されているかもしれない。しかしそれは文献史学による分析の結論が先にあって、瓦はそれを援用する素材に利用されているに過ぎない。」筆者もその意見に賛同する者である。

それでは、どのような研究が今後求められていくのであろうか。思うに、このようなまず結論ありきの研究により、当該遺物のある属性が、どのような事象を反映するかという、純粋に考古学的な追究がおろそかになっていたことが、もっとも重大な問題ではないだろうか。同様の指摘は幾人かの歴史考古学者や、また先史学の側からもおこなわれている。

千田嘉博氏は、前川要氏の主催するシンポジウム『中世総合資料学の可能性』の中で、「文字がないところで形とかモノをどこまで追求して、歴史を解明できるかという意味での（モノ資料の）総合化」が必要と述べている。

また山中一郎氏は、「「考古学」の方法は「先史学」の方法でしかない、と思っていますので、「歴史考古学」というとき、果たしてそれが存在しうる「方法」とは何かと考えます」という言い方で歴史考古学のあり方に疑義を呈している。

これらは重大な指摘としてとらえなくてはなるまい。

歴史考古学者も一人の考古学者として、考古学的方法論を重視し、まずはそこから可能な部分の歴史叙述を試みる必要があろう。そしてその研究成果を日本史学や関連諸学の成果と結びつけ、また議論を深めていけばよいと考える。

「学際」とか「学融合」などの言葉には、まだ明確な定義は存在しないように思う。前川氏らも、中世という時代を対象に、この両者の差異について考察を加えている。この前川氏らの議論の中でも各氏によってその解釈がかなり隔たっているものの、先に触れた千田氏や前川氏の考え方は、それらを広く理解しつつも、彼らが考える中世考古学の現状と課題を昇華していくために「学融合」という概念をもちいていこうという強い意思を示しているように思う。その「学融合」という概念が果たして全学問分野（歴史考古学と先史考古学の間でも）に共有できる言葉としての妥当な定義付けになるかはさて置きつつも、歴史考古学という研究分野の今後を考えるにおいてはたいへん有効な考え方であると私考する。それを大きく踏まえつつ、筆者の大胆な解釈を加えるならば、学問相互に、他分野の生の史資料、または史資料からの一次的解釈を援用しつつ、より多面的で信憑性の高い歴史叙述をおこなうのが「学際」、隣接する学問分野が、互いの方法論にもとづいた歴史解釈をまずおこない、そして、各分野によって復原されたそれぞれの「歴史像」を総合化していくことが「学融合」とみることはできないだろうか。もちろんこれはどちらが優れているとかいう優劣の問題ではなく、双方とも必要不可欠な作業である。しかし歴史考古学の分野においては、たとえばひとつの遺跡、ひとつのテーマを軸に多くの分野の研究者が相互に成果を持ち寄り、論題に対するより進んだ解釈をおこなうという方向性での「学際」的研究は数多いが、「学融合」的な試みはまだすくないように思う。

筆者が扱っている生産・流通の問題は、このような研究を進めるにあたって、格好の材料であると考ええる。また、これらの研究は、考古学の立場から決して等閑視されてきたわけではなく、多くの優れた先行研究が確かに存在する。しかし、多くの「歴史考古学者」が陥っている、古代社会像への「先入観」があり、残念ながらそれが考古資料を公平な眼で見ることを妨げている現状があるようにも思う。次章ではその具体例について論じる。

Ⅱ 具体的分析

1 律令期の社会とは

律令制下の社会というのが、どのような社会を目指し、またその実状がどのような形で運営されていたのかということは、日本史学・考古学問わず重大な関心事である。考古学の立場、とくに瓦の研究ではこれまで、寺院やその他の諸施設の造営においては、中央系の瓦の文様がつねに指向されたという前提のもとで議論されることが多かった。また瓦だけでなく、寺院の伽藍配置や寺域の設定、また官衙系施設の建物配置など、中央との共通点が強調される傾向にあった。そしてそこから復原される律令的社会像としては、すべてを中央政府が厳格に管理し統一する社会が描かれてきた。そのような大前提のもとでは、地方は中央のいわばミニチュア版であり（あることが本来的には求められており）、中央との共通性の高さというものが、「先進的」であることと解釈されることも多かった。

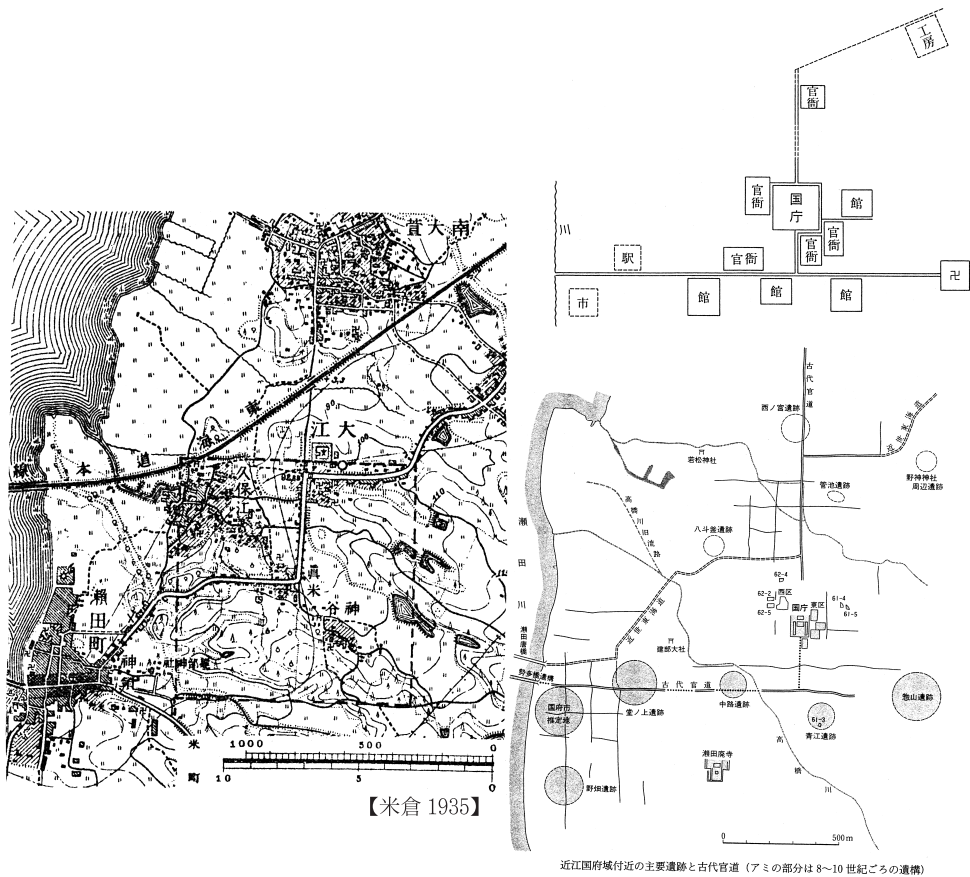
しかし、考古学的な調査事例の増大などから、その実状についての再考も唱えられるようになってきた。例えば国府域について、かつて言われていたような「方八町域」などの方形地割は存在せず、むしろ官道などに規定される形で官営施設の造営がおこなわれたということが、金田章裕氏によって提唱されている(第1図参照)。また国分寺の寺域についても、とくに関東地方の国分寺の調査成果等により、僧寺は方2町、尼寺は方1.5町といわれる伽藍地の外側に、それぞれの地形に沿った不整系の寺院地が、先行して設定されていることなどから、かならずしも画一的でない要素が多いことが判明してきている(第2図参照)。またこれらの指摘は、とくに前者など、考古学の成果に基づきながらも、歴史考古学者よりもむしろ歴史地理学者や日本史学者によって提唱し賛同されている面が多いことも特記すべき状況であろう。

また瓦においても、とくに国分寺などを中心に、わざと中央系のセット関係を外す例が一定量みられる。別項【梶原 2006】でも詳しく論じており、詳細はそちらを参照願いたい。筆者が好例として示したのは駿河国分寺ともいわれる片山廃寺の瓦と、備中国分寺・国分尼寺の瓦であるが、軒平瓦があきらかな中央系(平城 6663 系: 6663 型式は平城宮第二次大極殿の主要瓦)であるのに対し、軒丸瓦は非中央系であり、むしろ在地の文様の影響が強いことがわかる(第3図)。当然文様意匠の情報は、軒丸瓦・軒平瓦セットで入ってきていると考えられることから、文様の採否にあたっての地方独自の判断があったと思われ、そしてそれは、かならずしも中央系文様の無条件採用という方向性ではなかったことが指摘できる。

このように近年では、地方ごとに画一的ではない要素が指摘される傾向にある。それ自体は正しい指摘であると評価できる。しかしそれをもって律令社会は「多様であった」と結論付けるのは、結局何も言っていないと同じことではないだろうか。多様という言葉は便利な言葉ではあるが、多様であることを復原しただけでは、研究はそれ以上は進まない。多様性のむこうに法則を見出す努力を行い、先学に代わるあらたな「古代社会」像を提示する時期にきているのでは、と筆者は考える。もっとも筆者もまだその作業途上であり、明確な律令社会像を描くに到っていない。しかし、現段階では次のようなイメージをもっている。

「律令制下においては、すべてを中央に揃えることが強要されたのではない。むしろ、必要ならざるのみは揃えるが、例えば瓦の文様や生産体制などは各国の裁量に任される面が多かったのではない。各国の生産力や技術力を、すべて「統一」したり「集中」させるのではなく、それを正確に把握し、そのうえで効率的に運用するという方針が、律令国家がめざした「中央集権」の形ではないか。」

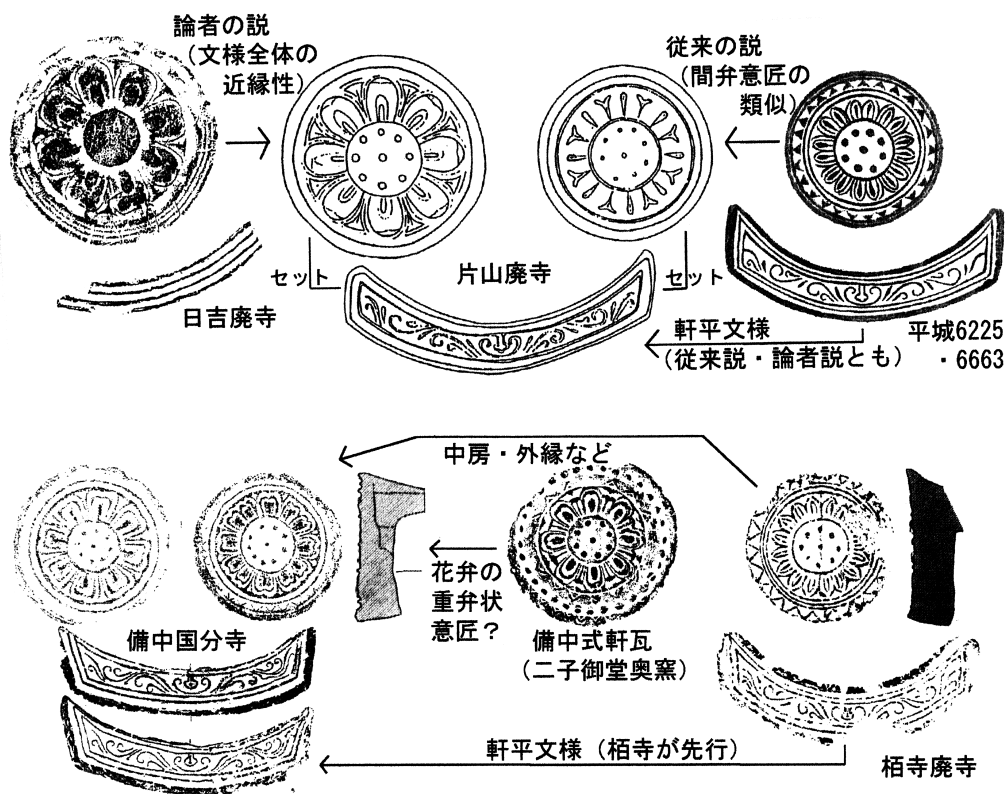
とくに古代を研究対象とする歴史考古学者は、古墳時代との連続性を潜在的に想起しつつ歴史を描いているように思うが、むしろ古墳時代とは「中央集権」のあり方がやや異質であったととらえるほうが、古代という時代相とその社会のあり方を考えていくうえでは、より理解しやすいのではと私考する。



第 1 図 近江国府域の復原



第 2 図 関東地方における国分寺の寺域【関東古瓦研究会編 1998】



第3図 片山廃寺・備中国分寺の瓦とその関連瓦

2 律令制の「衰退」

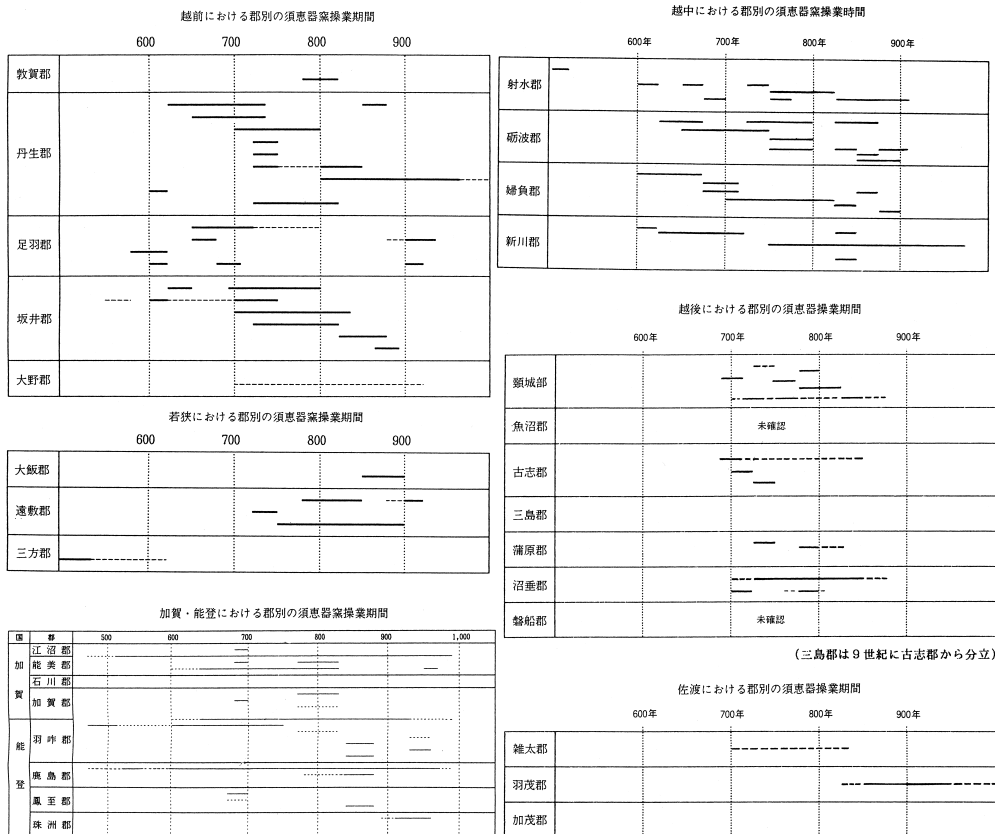
ここでは宇野隆夫氏の手工業生産体制論をとりあげる。宇野氏や氏をはじめとする「北陸古代手工業生産研究会」による一連の議論は、手工業生産のあり方を総体的に、しかも純粹考古学的な研究手法で分析検討をおこない結果を導き出しているという点で、古代手工業生産研究史上、たいへん優れた研究事績である。

宇野氏は古代手工業生産について、以下のように述べている(第1表参照)。

古墳時代の手工業生産が分業的であったのに対し、古代前期においては、須恵器などの手工業生産において自給自足的な体制の確立が重視され、須恵器生産においては一郡一窯体制が成立した。その背景としては、古代前期における国家の総力をあげた新技術の地方への扶植・手工業生産体制確立への努力がある。古代後期にはその体制が「ゆらぎ」、生産地の小規模分散化と一方での集約化がおこる(とくに後期を特徴付けるのは前者である)。

このとおり宇野氏は、古代前期のあり方を律令期の理想的な形態と考え、一方、古代後期は中世的生産体制(集約化)への移行期として消極的にとらえている。宇野氏の論にはうなずける点も数多いが、律令制下の手工業生産のめざした方向性については、考えが異なる。

第1表 北陸地方における郡別の須恵器窯操業期間



【北陸古代手工業生産史研究会 1989】

宇野氏が律令制下の手工業生産の理想的なあり方ととらえているのは、「一郡一窯」を代表とする自給自足の生産体制であるが、それは果たして本当に「律令的」なのだろうか。

筆者のこれまでの研究では、瓦生産においては、7世紀後半～8世紀初頭にかけて、地方ごとに拠点窯が設けられ、各地で瓦専門的な生産がおこなわれる。その体制は8世紀中葉の国分寺造営期あたりまで続くが、その後、国分寺瓦屋へと集約化されていく（その背景としては、当該期における在地寺院の減少により、地方において瓦需要が減少したことも関連するであろう）。つまり、律令期の盛期においてすでに、むしろ生産地数は縮小・統合・集約化の傾向にあるということである。

宇野氏らが扱った北陸の須恵器生産においても、国によってやや傾向が異なり判断が難しいが、生産地数のピークは7世紀末～8世紀初頭にあり、8世紀中葉にはむしろ減少傾向にある国も多い（第1表）。基幹生産品における均一的な技術扶植という、宇野氏の考える「律令的」様相は7世紀段階の話で、律令期（8世紀）にはむしろ、効率性を重視したその再整理が各国ごとの裁量でおこなわれた段階ではないかと筆者は考えている。

北陸における、小杉丸山遺跡（富山県）のような手工業生産センターの形成についても、宇野氏は「非常に高度な政治体制」を背景に想定しているが、かならずしもそれが全国的一般例とならなかったことを考えると、

- ・北陸という地域内部で創案された効率的生産体制
- ・中央の施策だとしたら、北陸のみその体制が適合するとの判断

と考えるほうがよく、むしろ一郡一窯体制のような、各地の生産力等の実状を考慮せず全てを均したような画一的な様相とは却って異質なものを示す好例としてとらえ直せる。

律令期の特徴をこのようにとらえると、それに続く9世紀の手工業生産体制への見方も、おのずから変わってくる。

筆者の研究、とくに「国分寺瓦屋と瓦陶兼業窯」【梶原 2005 a】を参照していただきたいが、8世紀後半に国分寺瓦屋に集約化した瓦生産体制は、需要が減少する9世紀になると、以下の2形態のどちらかとなる。

- ① 瓦生産組織を放棄し、必要時にのみ他から招聘する国
- ② 須恵器や灰釉陶器生産に工人を従属させ、技術系譜を継続させる国

この状況からは、9世紀を律令の手工業生産体制の「ゆらぎ」「崩壊」期としてとらえるよりはむしろ、「効率化」に応じた「集約化」という、8世紀後半以降のあり方、すなわち筆者の考える「律令的な」体制を、さらに推し進めた形態と評価できるのではないだろうか。そしてそれは、平安初期以降という時代において、地方で権力を増大しつつある国司によって積極的に主導されたと考えるのが、もっとも適切であろう。

そして、それが消極的選択の結果ではない傍証として、その生産体制が一定の成果をあげていたことは、当該期において同様に生産地の集約化が進んでいた鉄・塩について、「生産総量は増加傾向にあった」ことや、10世紀以降、須恵器の流通圏が拡大傾向にあることなど、宇野氏自身が過去に論じた内容が示すのではないか。

3 手工業生産からみた「中世」

ここでは吉岡康暢氏の大著『中世須恵器の研究』から、その成果の一部をとりあげ、それに関連して筆者の考えを述べることにする。

吉岡氏は中世的食器組成について、11世紀説（吉岡恵二氏ら）・12世紀説（宇野隆夫氏ら）の両者を紹介しつつ、「中世的食器組成の変容を庄園公領体制の形成と神人・供御人制の投影、ないしそうした文献史学の枠組み外での生産・流通活動と結びつけて理解しうるかどうか・・・」という判断のもとで、11世紀中葉を古代・中世の画期ととらえた。

さらにその段階には、生産（量産化と技術革新）・流通（広域窯の形成）のあり方もおおきく変容したと考えた。

筆者は食器組成等、古代中世の土器についての議論に対し論評できるだけの力を持たず、その点については私見を論じることは控える。ここでとりあげたいのは、文献史学による画期（庄園公領体制の形成）に連動する形で、食器組成・生産・流通にわたるすべての変革が果たして起こっているのか、ということである。

とくに流通面においては、10世紀初頭以降の、篠窯産須恵器の平安京やその他領域への流通をもって変革の起点とする、宇野隆夫氏の論もある【宇野 1984】。また、佐渡など東日本でも、9世紀後半以降にすでに、国を超えた商品としての流通が確認されている。これらの流通現象について吉岡氏は、「中流通」という言葉を使用し、11世紀以降の広域流通とは異質であるとしているが、他の様相を排した「流通」の画期としては、果たしてどちらが大きいのかは判断に迷うところである。

瓦の流通から考えると、地方産瓦の運京は、10世紀段階からすでに存在している。美作・備前・備中・備後・讃岐・大宰府など西国産瓦を中心に、平安京から出土が確認されている。11世紀後葉以降になると、従前の地域とはやや異なり、丹波・尾張・播磨・讃岐など、おもに著名な陶器生産地からの瓦の流入が主流になるが、地方からの瓦の運京が存在し続けるという現象は、10世紀と変わらない。

また地方の瓦生産体制においては、9世紀に成立した、国司管理の陶器窯に、瓦工人を付属させる形での瓦陶兼業体制が、12世紀段階まで継続している。その主導者についても、尾張智多郡の諸窯などにおいて、庄を越える形での瓦範の共有がおこなわれており、各庄園領主と協業しつつも、国司の裁量でおこなわれていた（9世紀同様）と考えられている。

それに対して13世紀になると、瓦工人は国司の手を離れ、多くは南都の大寺に所属する形となり、需要のある地方に出向き、寺院に近接する瓦窯を築いて商品としての瓦生産をおこなっていくという状況が、上原真人氏によって提示されている。氏はこの時期の生産体制の変革が、瓦生産における「中世」的展開と考えている。手工業生産一般にとっては、専門化した工人が権門への付属を強めていくという段階は、「座」の形成とも絡んできわめて重要な画期であると考えられる。そのような視点から、筆者も瓦生産の画期については、12世紀と13世紀の間におくという考え方に賛同する。

このように、瓦生産における画期は、文献史学の成果からみた古代と中世の画期とは一致しない。しかしそれはむしろ当然であり、すべての事象がすべての地域、すべての文物において連動して一度に変化するとは限らないのではない。確かに時代の変化にあたっては、多くのことが変化するであろう（とくに吉岡氏が述べたような食器組成など、儀礼等にも深く関係してくることは）が、それはすべての事象に前提としてあてはまることではない。

考古学の立場としては、既存の時代区分は尊重しつつも、それに合わせる形で無理に考古資料の解釈をする必要まではない、と考える。

おわりに

以上、私見を縷々と述べてきたが、とくに具体事例の1・2として述べたような律令期の姿というものは、日本史学の研究現状からは、すでに至極当然のこととして論じられており、私がここで大きな声をあげる必要もないことであるとも言える。しかし、資料の類似性を見つけだし括するという手法が、考古学的手法のおおきな特質であることも背景にあるのだろうが、考古学の側は、かならずしもそういった律令社会像をうまく受容できていないように思う。これはある意味、隣接分野の研究動向への軽視でもある。あらためて述べるならば、文献の内容ばかりでなく、その学問としての研究成果にもきちんと目を配り、より高みを目指すことが、いま歴史考古学に必要なとされている（当然ではあるが、案外実行されていない）ことであると考えている。

本稿は、平成17年度名古屋大学大学院文学研究科プロジェクト「物質文化の歴史学創成」のもとで2006年1月におこなわれたシンポジウム「物質文化の歴史学再考「文化コンテクスト学」の構築をめざして」において筆者が発表した内容に、若干の加筆修正をしたものである。本プロジェクト代表の周藤芳幸氏をはじめ発表者の諸先生方、とくにおなじセッションにおける発表者である佐藤信氏、高橋照彦氏、古尾谷知浩氏には、多くのご指導ご教示を賜った。末筆ながら心より御礼申し上げます。

主要参考文献

- 上原真人 1978 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14
 上村和直他 1994 「瓦と瓦窯の変遷」『平安京提要』角川書店
 宇野隆夫 1984 「後半期の須恵器」『史林』67-6
 小田富士雄 1977 『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社
 梶原義実 2000 「国分寺造営期の瓦供給体制」『考古学雑誌』86-1
 梶原義実 2003 「造瓦組織の復原と瓦当文」『史林』86-3
 梶原義実 2005 a 「国分寺瓦屋と瓦陶兼業窯」『日本考古学』19
 梶原義実 2005 b 「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開」『考古学研究』52-1
 梶原義実 2006 「瓦当文様の受容に関する一考察」『考古学研究』53-3
 関東古瓦研究会編 1998 『聖武天皇と国分寺』雄山閣
 金田章裕 2002 『古代景観史の探求』吉川弘文館
 鬼頭清明 1977 「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布」『古代研究』11
 八賀 晋 1973 「地方寺院の成立と歴史的背景」『考古学研究』20-1
 北陸古代手工業生産研究会 1989 『北陸の古代手工業生産』真陽社
 前川 要編 2004 『中世総合資料学の可能性』新人物往来社
 森 郁夫 1991 『日本の古代瓦』雄山閣
 森 郁夫 1998 『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
 山崎信二 1994 「平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」
 1993 年度文部省科学研究費一般研究C
 山中的一郎 2004 「考古学における方法の問題」『郵政考古紀要』35
 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
 米倉二郎 1935 「近江国府の位置について」『考古学』6-8

Abstract

Region Society of Nara / Heian Period from Manual Industry Production

KAJIWARA Yoshimitsu

In this article, I insist in historical archaeology an ideal method of co-operation with documents historical study from particularly ancient manual industry production.

In historical archaeology until the present, a study to just apply an archeological phenomenon to content of documents was the mainstream. However, recently a claim that we should make much of archeological original methods is performed, and I agree it. And with that in mind, as a concrete example on thinking about ancient society, I take up three phenomena and discuss it.

At first, as local society image of the *ritsuryo* (civil and penal codes) period, I did not agree an opinion that all things were gathered centrally, and I insist that many things were entrusted local governments, and central government was grasped these precisely, if necessary, to applied effectively.

To the second, as an ideal method of *ritsuryo* system of the latter ancient period, from an archeological side, often insisted an idea of this system was already collapsed and declined. But I insisted the collection and promotion of efficiency of the production organization were promoted positively by *kokushi* (provincial supervisor).

To the third, about the start time of the Middle Ages when looked from manual industry production, I insisted that change of production systems occurred different time every production.

I performed a proposal about the direction that historical archaeology would aim at in future by putting up such examples.